猿の聟入

むがし、あるどごえな、つぁど、あばどえだけど。そごの家にな、女わらし三人持ってだけど。そごのとうちゃんな、せやみとうさんだけど。ひらぎおごして、まず、粟まえで見だども、草生えで、粟なんだが、草なんだが、わがらなぇぐなってしまたげど。せやみとうちゃんだおだがら、毎日たばごなおばり吸ってで、さっぱり草むしりさねぇおんだがら、あまりおが生えでしまて、べぇこばりむしたたて、なじもされなぁぐなてしまたけど。

なんとしたらえがどんてだば、あるじき、石さ腰かけでたばこ吸いながら「このかんのの草むしって呉だ人さ三人えだ娘のうぢの一人呉るウー」って叫んだけど。したば、猿あ戴からガサガサガサァッと出はって来て、「今言った言葉ほんとだべがなんし」てゆだげど。「ああお前おれ言ったことを聞きづげで来たなだが」て言ったば、「うん、聞いだがら来たなだし、本当に娘呉でけるごたんば、おれこの草今日一日明日一日で、粟だが草だが見わけつけでむしてけるがら、その娘なでかで呉でけるんべな」て言うんだど。「はいはい呉る」って言ったば、次の日、そのとおり、チャンと草むしてしまたけど。「あした、もらいにえぐがらな」て、猿あゆけど。一日たち二日たち、三日目になったどごで貰いン来るごどになったべ。草ァむしってもらってえがったべの、猿さ娘けるな、苦ッして、朝まになても、せやみおやじあ寝て起きねえんだど。

一番大きい姉娘あ「つやあ起ぎで飯食え」せやみおやじあな「あまり苦だことあって起ぎらえねあ」てゆけど。「誰がおれ言うごどを聞いで呉る人いれば起ぎで飯食うども、おれ言うごど聞いて呉んねどおれ飯食あね」って、ゆたげど。「なんのごどよ」「おれな、こういうわげでかんのの草むしって貰ったんだえて山男さ嫁っこ呉るはじした」ったら、姉娘「誰ア」て言ったんだど。「猿っこさなの、いがね」って逃げていってしまったげど。

二番目の娘あ、起ごしに来たけど。「つあ、起ぎで飯食え、飯食ねば死んでしまうだから飯食け」「だってあまり苦だごどあって」「何よ」「こういうわけで猿っこさ嫁呉るはんじして来たァ。誰が、いって呉んねばおれ死ぬよりほがねや」「誰あ」ってニ番目も逃げでいってまったど。

こんだ三番目の娘あ来たけど。「つあ、起きて飯食、飯食ねば体やせて出来ねだから飯食え」「だっておれこうわけで、なったことしたらええんだが、どんて苦うしてだあ」「なんよう、つあ、いうことだら聞がねねべった」そう言ってやさしい言葉だしたけど。「おれせあこういうわけであまりに草生えだんだがら、かんのの草むしって呉た人さ娘三人いだうちの一人呉るってさがんだんば、こういう人あ来てむしって呉だけお。その人さおれ娘一人けねね。誰がいって呉れば飯食うども、いって呉ねごったんば死んでもええから飯食あね」こういうんだど。「したら、しかだね。親孝行になるごたば、おれあゆうごときぐがら起ぎで飯食って呉ろ」ていったば、起きで飯食ったけど。したばな、「おれ約束通りに来たえて、承知して呉ろ」こういって猿っこあ来たど。

さあわらしたじあ叫ぐ、叫ぐ。「おらなのいがねえ、おらなのいがね」「おららのいがね、おらなのいがねえ」って叫ぐど。「叫ぐな叫ぐな、いがねばいがねでええがら叫ぐな」って、つあゆたば、一番下のべったなつあゆたけど。「大事にしてもらわねば困るがら、大事にして呉ろ」ってそういって三番目どご呉でやったけど。

「ほう猿かが猿かが」ってきかねえわらしたぢやしめるケド。行ってみたば、やっぱし山の笹藪でな、そごそ栗の林、ずーっとこえで山奥だけど。そして山奥さ小屋っこ建ででその小屋っこの中で過ごすなだけど。

「あああ、まずまず死んだよりゃ良んだが、生きででえんだが」って娘ァ口説くんだど。だって口説いるんだと。「なじが、ええ機会ねえもんだべが、なじがして逃げでえもんだ、なじがしてこの人どご、居ねぐしてもんだ」ど思ってぐあもん（顔文）にかけてその娘は暮したんだと。そしたばあ、三月の節句あ来たんだど。そしたら娘あゆたど、「今日は三月の節句で、どごでも餅をつくんだなあ、おら家だばつかねんだども」とこう言ったんだど。「おお、ひめっこ、ひめっこ、だら餅つぐべ」って臼出して猿っこあ、餅ついだんだどよう。

「あらああ、うめそうだごど。この餅おら家のつあどあばどさ持ってって食せだらば何ぼ喜ぶんだべが」て言ったんだど。「ああよしよし、んだらこれ、なんべさせで、たげでごが、こん餅にして背負ってごが」って言うんだど。「あらおら家の人だぢあ、あのくさぎれえする人だちで、あれさせだり、これさせだりしてちょすど食ね人たぢで。このまま持って行ぎでなあ」て、言ったんだど。「ああよしよしひめっこ、よしよしひめっこ。んだらこのまま背負ってぐど」ってその臼まずから背負って、娘どごどにして行ったんだど。

そしてえぐうぢに、まずこごだば、ちょうどが、くば橋のたもどみでえだどさ、来たけど。下は川だべせあ。その川さなんびだ桜の木あったけど。「あああああえぇ桜だごど」って二人して休んだんだど。その娘は「あらああえぇ桜だこと、あの桜おれのあばとつあとさ持って行って見せたらどんなに喜こぶべて言ったんだと。「よしよしひめっこ、おれそれをとって来て、ちあどあばどさ見せるべし」ってゆて。「だら、こごさ臼置いでとりにえぐ」ってゆうんだど。したば、娘あ「おらえのつあなの、あばなの、こごあたりさ置けば土臭えって食わねえべお」って言ったんだど。「ああよしよし、だば臼背負ってのぼって折ってくる」って、その臼背負ったまま桜の木さはい上ったんだど。

「これええがひめっこ」って猿あゆたば、「もう少し上のなよ」「これええがひめっこ」ってゆたば、「もう少し上のなよ」ってずっととってべこまであがたけど。「んだらこれが」ってゆたば「お前上ってだな、ええなあ」て言ったんだど。猿あ「これがあ」てわあがってだな、バショッとおしよったんだけど。そしたば猿あ臼まじからダボンと川さ落ぢでしまたけど。

「あら仕方ねごど、仕方ねごどー」って叫んだど、な。そしたば「猿の命はいらねども、あどでひめっこは泣くべなぁ、泣くべな」って流れでえたけど、って、わあめんこいために、ひめこもおれどごめんこいなだてい意味を語って流れでいったけど。

それがら、ひめっこあ、わえさえたごであ。そして「こ言うわげで来た」って言ったごだや。そしたば姉だぢあ「さるのかかだ」どて卑すめだべども、親たぢあ喜こんだべし、世間の評判も「親孝行だ娘だ」どってええどごさもらわれで立身したっけど。

だからよう、親の言うごとあ聞くごど。な、そして、何でも悪いごどはさねごど。

あとはとっぴんぱらりのプー